

『東京八景』の成立

山内祥史

I

まず、初出に即して、小説集『東京八景』（實業之日本社、昭和十六年五月三日）に収載された作品の、作品名・発表誌紙名・巻号数・発行年月日・所載欄・所載頁などの諸項を、発行年月日順に記すと、つぎのようになります。

- (1) ロマネスク・青い花・創刊號・昭和九年十二月一日發行・5～27頁
- (2) HUMAN LOST・新潮・四月號、第三十四年第四號・昭和十二年四月一日發行・「創作」欄・181～205頁
- (3) 盲人獨笑・新風・七月創刊號・昭和十五年六月十三日發行・29～44頁
- (4) 新連載中篇／乞食學生／第一回・若草・7月號、第十六卷第七號・昭和十五年七月一日發行・6～13頁
- (5) 連載中篇／乞食學生／第二回・若草・8月號、第十六卷第八號・昭和十五年八月一日發行・36～43頁
- (6) 乞食學生／第三回・若草・9月號、第十六卷第九號・昭和十五年九月一日發行・38～45頁
- (7) 失敗園・東西・九月號・昭和十五年九月發行
- (8) 乞食學生／第四回・若草・「十五周年記念特輯」、第十六卷第十號・昭和十五年十月一日發行・20～28頁
- (9) 一燈・文藝世紀・十一月號、第二卷第十一號・昭和十五年十月十二日發行・48～51頁

(10) 連載中篇／乞食學生／第五回・若草・11月號、「奉贊・皇紀二千六百年」、第十六卷第十一號・昭和十五年十一月一日發行・44〜51頁

(11) きりぎりす・新潮・十一月號、第三十七年第十一號・昭和十五年十一月一日發行・「創作」欄・182〜195頁

(12) 短篇ラヂオ小説／ある画家の母・AK放送台本・昭和十五年十一月五日放送・1〜13頁

(13) 連載中篇／乞食學生／第六回・若草・12月號、第十六卷第十二號・昭和十五年十二月一日發行・48〜57頁

(14) 東京八景・文學界・正月號、第八卷第一號・昭和十六年一月一日發行・128〜151頁

ただし、右のうち(7)の「失敗園」は、初出誌確認がかなわず、推測で記したものです。その根拠となったのは、日本文学研究資料刊行会編『太宰治（日本文学研究資料叢書）』（有精堂、昭和四十五年三月二十日）所載の、津島美知子夫人「創芸社版『太宰治全集』後記」の「第六卷」の項の、「『失敗園』（東西）昭和十五年九月号」という記述です。

さて、太宰治作品年譜の嚆矢「太宰治主要作品年譜」（『日本讀書新聞』第四四七号「作家太宰治」昭和二十三年六月三十日）から、この稿に関連する部分を引用すると、つぎのように記されています。

◇十年◇「ロマネスク」青い花10

◇十二年◇「HUMAN LOST」新潮4

◇十五年◇「盲人独笑」新風4「乞食學生」若草7―12「一燈」文藝世紀11「きりぎりす」新潮11

◇十六年◇「東京八景」文學界1

同じ時期の、岸金剛氏著『太宰治の作品とそのモデル』（城南社、昭和二十三年八月十五日）所載の「太宰治作品年譜」にも、すべて同様に記されています。さらに、「太宰治全集創作年表（既刊分）」（『太宰治全集附録第一號』八雲書店、昭和二十三年九月一日）には、

HUMAN LOST 「新潮」昭和十二年四月

ロマネスク 「青い花」昭和十年一月

と記され、「駄込み訴へ 創作年表」(「太宰治全集附録第四號」八雲書店、昭和二十三年十一月三十日)には、

盲人獨笑 新風 昭和十五年七月

と記され、「東京八景創作年表」(「太宰治全集附録第五號」八雲書店、昭和二十三年十二月三十日)には、

乞食學生 若草 15年7・8・9・10・11・12月

一 燈 文藝世紀 15年11月

リイズ ラジオ放送 15年12月

失敗園

きりぎりす 新潮 15年12月

東京八景 文學界 16年1月

と記されています。

これら初期作品年譜類の記述を、冒頭に記した初出の状況に照らして比較すると、つぎのような指摘ができるようです。まず、「日本讀書新聞」の「太宰治主要作品年譜」、岸金剛氏の「太宰治作品年譜」では、(2)(3)(4)(5)(6)(8)(9)(10)(11)(13)(14)が正しく記され、(1)があやまり記され、(7)(12)は記されていない。さらに、八雲書店版『太宰治全集』の「創作年表」では、(2)(3)(4)(5)(6)(8)(9)(10)(13)(14)が正しく記され、(1)(11)(12)があやまり記され、(7)は記されていない。つまり、前者で正しく記されていた(11)が、後者では一か月ずれてあやまりとなったが、前者で記されていなかった(12)が、後者では「ラジオ放送 15年12月」と記された、その二点が、両者の主要相違点だといえるようです。

以後、これらの初期作品年譜が、どのように訂正されて現在にいたっているか、(1)の「ロマネスク」については、

すでに拙稿『晩年』の書誌」(「太宰治研究」第十号、昭和四十四年九月十九日)で考察しましたので、以下、その他の作品に限定して確認しておきたいと思います。

まず、檀一雄氏著『小説太宰治』(六興出版社、昭和二十四年十一月二十日)所載の戸石泰一氏編「年譜」の「昭和十五年」の項には、

「乞食學生」(月刊文章、一月より六月)

「女の決闘」(若草、七月より十二月)

等の中篇を發表

と、「女の決闘」と「乞食學生」との發表が、逆に記されています。その後、『東京八景他十二篇 太宰治全集第六卷(近代文庫124)』(創藝社、昭和二十九年十一月二十日)所載の津島美知子夫人「後記」において、(4)(5)(6)(8)(10)(13)の「乞食學生」が、

「乞食學生」(若草) 昭和十五年七、八、九、十、十一、十二月

と記され、(11)の「きりぎりす」が、

「きりぎりす」(新潮) 昭和十五年十一月

と記され、(12)の「ある画家の母」が、

「リーズ」(ラヂオ放送) 昭和十五年十一月

と訂正され、さらに付記して、

「リーズ」は、昭和十五年十一月五日、短篇ラヂオ小説「ある画家の母」としてJOAKから放送されたもの、台本で、「みみづく通信」のはじめに作者が言及してゐるのが、これです。

と、詳細に記されました。が、(7)の「失敗園」については、「掲載誌不明です。」と記されて、「発表年月と掲載誌名」

が記されていません。この津島美知子夫人「後記」が、『太宰治（日本文学研究資料叢書）』に、「創芸社版『太宰治全集』後記」と題し、「昭和四十五年」に補訂して再録された際に、はじめて、

「失敗園」（東西） 昭和十五年九月号

と、「発表年月と掲載誌名」があきらかにされたわけです。

以上が、初出に関する、現在にいたるまでの訂正状況です。

ところで、この小説集『東京八景』は、太宰治の著書としては、第八の著書『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）につぐ、第九の著書にあたります。『女の決闘』は、すでに拙稿「短篇集『女の決闘』の成立」（『論集』第二十三巻第二号、昭和五十一年十二月十五日）でみたように、「昭和十五年前半期小説の集成」であって、昭和十五年一月一日発行の雑誌に発表された「女の決闘（中篇）連載第一回」「春の盗賊」から、昭和十五年六月一日発行の雑誌に発表された「女の決闘（完結）」「古典風」までの小説を収載しています。この間に発表された小説で、短篇集『女の決闘』に収載されなかった小説は、ないわけです。それにつづく、小説集『東京八景』は、「若草」七月号から連載の「乞食學生」、「新風」七月号に発表の「盲人獨笑」以後に発表した小説で、「文學界」一月号に発表の「東京八景」までの小説を中心にして、成った著書だといえます。ただし、この間に、「連載ろまん燈籠（その一）」（『婦人畫報』第四百四十二号、昭和十五年十二月一日）、「ろまん燈籠（その二）」（『婦人畫報』第四百四十三号、昭和十六年一月一日）、「清貧譚」（『新潮』第三十八年第一号、昭和十六年一月一日）、「みづく通信」（『知性』第四卷第一号、昭和十六年一月一日）、「佐渡」（『公論』第四卷第一号、昭和十六年一月一日）等の小説が発表されています。しかし、このうち「ろまん燈籠」は、連載であって、「ろまん燈籠（その六）」（『婦人畫報』第四百四十八号、昭和十六年六月一日）で完結したものですから、未完であったわけです。したがって、小説集『東京八景』に収載された作品は、昭和十五年後半期に発表された小説に、『晩年』（砂子屋書房、昭和十一年六月二十五日）に既収

載の「ロマネスク」、種々の事情から著書に収載されていなかった「HUMAN LOST」と、昭和十六年一月に発表された短篇「東京八景」との計三篇を加えて成ったもの、といっているでしょう。かくして、小説集『東京八景』は、昭和十五年後半期小説を中心として、「青春への訣別の辭として」の短篇「東京八景」までの小説を収載した作品集であった、といっているでしょう。

II

さて、以上のように発表された小説集『東京八景』収載の諸作品が、すべて完成したのはいつのことか、つぎにその問題を考察してみます。

まず、(1)の「ロマネスク」は、すでに拙稿『晩年』の書誌」でみたように、昭和九年八月中に執筆し脱稿したものと推定されます。小説集『東京八景』に収載の作品の裡で、この「ロマネスク」だけが、著書既収載の作品です。それだけに、作品「ロマネスク」への太宰治の執着が読みとれるようにも思われますが、おそらくは、出版社からの要請で作品量をふやすために加えられたのだろうと思われるます。昭和十五年十二月十二日付の山崎剛平氏宛の太宰治の手紙に、つぎのような一節がみられます。

それからもう一つお願いがございます 「晩年」の中のロマネスクといふ作品を來年春頃出版豫定の新創作集に編入する事をどうかおゆるし下さい お願ひ致します 實業之日本社から出版のものであります

周知のように、山崎剛平氏は砂子屋書房主で、「ロマネスク」はその砂子屋書房から刊行された『晩年』にすでに収載されていたのです。それで、山崎剛平氏の了解を求めたものと思われるます。

つぎの(2)「HUMAN LOST」については、「鐵面皮」(「文學界」第十卷第四號、昭和十八年四月一日)に、つぎの

ように記されています。

昭和十一年十月十三日から同年十一月十二日まで、一箇月間、私は暗い病室で毎日泣いて暮してゐた。その一箇月間の日記を、私は小説として或る文藝雑誌に發表した。わがままな形式の作品だったので、編輯者に非常な迷惑をおかけした様子である。HUMAN LOST といふ作品だ。すべて、いまは不吉な敵國の言葉になつたが、パラダイス・ロストをもちつて、まあ「人間失格」とでもいふやうな氣持でそんな題をつけた(略)

この「鐵面皮」の一節に相應するように、「HUMAN LOST」は、たしかに「昭和十一年十月十三日」から昭和十一年十一月「十二日」までの、「日記」の体裁で記されています。しかし、この日記は、はたしてこの「一箇月間」の入院中に記された日記であつたのかどうか、ということが問題になります。これに関連して、中野嘉一氏は、「わが職業を語る」(「詩學」第七卷第十一号、昭和二十七年十一月三十日)に「つぎのように記されています。

學校を出たのが昭和六年精神科の教室に五年ばかり居て板橋の精神病院に勤務していた頃太宰治がモヒ中毒で入院、私が主治醫で彼の性格や心理分析に興味を持つた事もあつた。

また、中野嘉一氏「精神科入院時代の太宰」(「新潮」第六十二卷第九號、昭和四十年九月一日)には、つぎのように記されています。

その病院の懐しい思い出に太宰治のことがある。實は彼がパピナル中毒の患者として入院して來て、私がその主治醫になつたわけであるが、昭和十一年十月頃であつたろうと思う。カルテには津島修治(二十八歳)と書かれていた。この男が太宰治であることを知つたのは少したつてからのことである。入院した晩、逃走の虞れありといふので、開放病棟から鍵のかかつた病棟に收容された。一週間位はおちつきなく、恐らく夢中であつたろう。不法監禁、インチキ病院、虐待、命保たず、救助タノム、詐欺、裏切り者等と壁紙や硝子戸に色鉛筆で書きなぐつていた。看護日誌には廊下徘徊、逃走要注意などと書かれてあつた。回診に行くと、「内證でここから出

して下さい」と平身低頭したり、私や看護人が廊下を通ると、動物園の猿のように鐵格子につかまつて出してくれ、出してくれとどなつたので、可哀想に想つたこともある。

ひどい禁斷症狀がとれると、彼は別人のように黙つて坐り、考えこんでいた。夜あけに眠れないで、廊下を歩いたり、薬包紙に「あかつきばかり物うきはなし、先生、何とかいいお薬を盛つて下さい」と書いて看護人に渡し、薬局に眠り薬をとりに來させた。薬局ではなかなか面白いことを書く患者だと感心していたが、彼の諧謔性、時にユーモアに富んだ文章は、その頃既に際立つていたように思う。（傍点、山内）

さらに、中野嘉一氏「作家と睡眠薬」（新潮）第六十九巻第十号、昭和四十七年九月一日）にも、つぎのような一節がみられます。

太宰治は睡眠薬中毒ではなく、パビナル中毒で板橋の東京武蔵野病院に入院した。当時（昭和十一年）私は一カ月余り彼の主治医だったことがある。パビナル中毒は案外早く治ったが、前々からあった不眠症に悩み毎晩のように「あかつきばかり物うきはなし、先生、一服、眠り薬を下さい」などと薬包紙に走り書きしていたことを思い出す。当直医の私は毎晩のようにそんな紙片をもつてくる看護人に起されたりはしたが、むしろその紙片を楽しむに待っていたものだ。勿論太宰治も当時は無名の作家で、退院するとき一冊始めて本を出したといつて私にくれたのが「晩年」という本であった。彼の病室には津島修治という名札が懸っていたし誰も風変わりな文学青年ぐらいにしか思っていなかった。薬包紙の走り書きには赤鉛筆の太い字で、「一心不乱、一心不乱」とか「創騎、杉山平助様」「井伏鱒二様様」などと書いたものがあつた。（傍点、山内）

ところで、井伏鱒二氏の「十年前頃——太宰治に關する雑用事——」（群像）第三卷第十一號、昭和二十三年十一月一日）には、井伏鱒二氏の当時の「日記」が引用されています。それによれば、昭和十一年「十月十三日」の項には、「五人、自動車にて雨中を江古田の東京武蔵野病院に行く。日が暮れて着く。診察を受け、入院絶対必要なりとの診断

にて入院と決定す。(略) 病室に太宰を置いて歸る。」とあり、「十月十五日」の項には、「病院長より北芳四郎氏へ電話あり。患者太宰治は自殺のおそれあり、故に監禁室に移し看視人をつけたいと諒解を求む電話なり。北氏承諾せり。初代さんよりの報告なり。」とあります。中野嘉一氏の「逃走の虞れあり」という記述は、井伏鱒二氏の「日記」では「自殺のおそれあり」となっていて、また、中野嘉一氏の「入院した晩、開放病棟から鍵のかかった病棟に收容された。」という記述は、井伏鱒二氏の「日記」では、入院、二日後の「十月十五日」に、「監禁室に移し看視人をつけたいと諒解を求む電話」があった、となっています。このように、中野嘉一氏の記憶と井伏鱒二氏の記録との間には、種々のくいちがいが指摘できるようです。けれども、先の中野嘉一氏の文章の傍点を施した部分、太宰治が何らかの記録をする可能性はあったという状況は、記憶ちがいではないように思います。井伏鱒二氏の「日記」にも、「十月二十九日」の項に

初代さん、太宰宛てに來た手紙二通を持つて相談に來る。一通は新潮社より、新潮新年號に小説を書けといふ手紙なり。他の一通は改造社より、改造新年號に小説を書けといふ手紙なり。

院長に頼み、太宰に執筆できるやう取りはからふがよろしいと小生答へる。

とあります。「院長に頼」めば、「執筆できるやう取りはからふ」ことが可能であったのだといえるでしょう。結果的には、この井伏鱒二氏の考えは北芳四郎氏の「大反對」にあり、「兩誌編輯者」に「入院中につき、健康の恢復次第、執筆のつもりと申し込」むことになったようですが。なお、相馬正一氏『太宰治(中)―排除と反抗―』(弘前市立弘前図書館、昭和四十四年三月三十一日)の「パビナル中毒事件」の項によれば、中野嘉一氏は「昭和41年11月12日」につきのような談話を語られたそうです。

入院中は小説などは書かせませんが、患者の要求があればその症状に応じて鉛筆やノートを与える場合もあります。太宰は狂暴性がなかったので、まもなく彼の要求に従って特別に机、便箋、鉛筆、朝日新聞などを与えま

した。個室は六畳間の畳敷きで押入れもあり、廊下側は障子、外側は鉄格子のはまったガラス窓でしたが、天井が高く部屋の中は日中でも薄暗かったので、新聞を読んだり字を書いたりするのは大変だったと思います。途中から雑誌や書籍なども許可しましたが、手紙は外部からのものも内部からのものすべて検閲することになっていました。朝日新聞を毎日配っていたので、当時学芸欄を担当していた杉山平助に宛ててよく手紙を書いていました。実際に郵送したかどうかは分かりません。

以上の諸資料から、「HUMAN LOST」の裡には、この入院中に記された文もふくまれているだろうと推測することができます。しかし、これを実際に脱稿したのは、昭和十一年十一月二十四日ではないかと思います。そのように推測しうる理由については、すでに拙稿『二十世紀旗手』の書誌（『日本文学』第十九卷第六号、昭和四十五年六月一日）に述べたので省略しますが、前後の状況から考えて、その推測にまちがいはないだろうと思っています。

かくして「HUMAN ROST」は、昭和十一年十月十三日以後に執筆開始され、同年十一月二十四日に脱稿した、と推定しうるように思われます。

つぎの(3)「盲人獨笑」に関しては、その「はしかき」のつぎの一節が、執筆の動機を説明しています。

葛原勾當日記を、私に知らせてくれた人は、劇作家伊馬鵜平君である。堂々七百頁ちかくの大冊である。大正四年に、勾當の正孫、葛原幽といふ人に依つて編纂せられ、出版と共に世人を驚倒せしめたものであるが、不勉強の私は、最近、友人の伊馬鵜平君に教へられ、はじめて知つた次第である。私一個人にとつては、ひどくもの珍らしい日記ではあつても、世の讀書人には、ああ、あれか、と軽く一首肯を以てあしらはれる普通の書物であるのかも知れない。そこは、馬鹿の一つ覚えでおくめんも無く押し切つて、世の中に我のみ知るといふ顔で、これから、仔細らしく物語らうといふわけである。

「劇作家伊馬鵜平君」が、『葛原勾當日記』（博文館、大正四年十一月二十五日）を太宰治に知らせたのはいつか。

それにふれたものに、昭和十五年五月二日付の伊馬鵜平氏宛太宰治のはがきがあります。

きのふは、おつかれ様でした。案内係の勞、まさに殊勲甲でございました。ありがたう。／お話の「盲人日記」おひまの折、こちらへ送つていただけませんか、ぜひ讀んでみたいと思ひます。

また、伊馬春部氏「酒と旅行と」(「太宰治全集第四卷月報4」)(筑摩書房、昭和三十一年一月二十日)には、つぎのように記されています。

昭和十五年といふ年は、太宰がよく旅に出た年である。私が一しよだつたのは、まず四萬温泉だが、上野立出が四月三十日、私のかけつけ方が遅くて、太宰は井伏さんと共に待ちかねてゐた。「や、來た來た……」太宰の聲音がいまでもよみがへる。中村地平・小山祐士は突發事があつて不參、早稻田の學生の石川、佐藤、則藤の三君が同行した。(略)／(略)その折のスナップの一枚が、今度の『文學アルバム・太宰治』の41頁にをさめられてゐるが、浴槽でのそれは大いに物議をかもした。つまり今のことはでいへば太宰のヌード寫眞なのであつて、『葛原勾當日記』と共に受取つた彼の葉書によれば、家中を火のついたやうに飛び廻つたとある。立川乗越し事件の葉書と共に、遺つて居れば珍品なのだが、失せてしまつたのは残念といふの他はない。

以上のふたつの引用でおわかりだと思ひますが、昭和十五年四月三十日、太宰治は、井伏鱒二、伊馬鵜平、および早稻田大学學生の石川隆士(国文)、佐藤安人(英文)、則藤大蔵(仏文)などの諸氏と共に、伊馬氏の案内で上州四万温泉に遊んでいます。その夜は、伊馬氏の友人阪田英一氏所有の四万館に止宿、翌五月一日の興亜奉公日にかえっています。はがきという「盲人日記」のへお話／＼は、その旅の折に、伊馬鵜平氏から聞いたものと推測されます。伊馬鵜平氏宛の『葛原勾當日記』を「受取つた」はがきがあれば、入手の日も明確に推定できるのですが、「失せてしまつた」といわれる今は、残念ながら、確認の方法がありません。太宰治が、『葛原勾當日記』を、入手し読んだのは、五月三日以後のことだと推測しておくほかないでしょう。

さて、「盲人獨笑」掲載の「新風」七月・創刊號は、奥付によれば「昭和十五年六月十日印刷／昭和十五年六月十三日發行」と記されています。また、「新風七月・創刊號」の広告が、「朝日新聞」昭和十五年六月十四日付（第二万七千七百四号）に、掲載されています。したがって、同誌は六月十三、四日頃、発売されたものと推定されます。とすれば、「盲人獨笑」は、おそらく昭和十五年五月末日までには執筆脱稿されたであろうと、推測できるように思われます。

ところで、『女の決闘 太宰治全集第五卷（近代文庫）105』（創芸社、昭和二十八年九月十五日）掲載の津島美知子夫人「後記」に、つぎのような記述がみられます。

「盲人獨笑」を「新風」に發表したときは、正月六日の項、／「おかや。こらしめのため。あちごじし。琴にて。九十へん。」／となつてゐました。それを、勾当の孫、葛原幽氏に「あの長い曲を十九へんにしてもまだひどい」（「筆」第一輯所載「葛原勾当をモデルの盲人獨笑をよみて」と指摘されて、小説集「東京八景」に収録するるとき、「四きのながめ。琴にて。三十二へん。」と訂正した顛末は、隨筆「文盲自嘲」に明かです。

隨筆「文盲自嘲」（「琴」第一輯、昭和十七年十月）は、昭和十五年十一月に發表の予定で執筆されたと推測されるものですが、つぎのような内容の文章です。

先夜、音楽學校の古川といふ人が、お見えになり、その御持參の鞆から葛原しげる氏の原稿を取り出し、私に讀ませたのですが、生れつき小心な私は、讀みながら、ひどく手先が震へて困りました。かふいふ事が、いつか必ず起るのではないかと、前から心配してゐたのでした。私は、「新風」といふ雑誌の七月創刊號に、「盲人獨笑」といふ三十枚ほどの短篇小説を發表しました。それは、葛原勾當日記の、仮名文字活字日誌を土臺にして、それに私の獨創も勝手に加味し、盲人一流藝者の生活を、おぼつかなく展開してみたものでした。けれども、この勾當の正孫の、葛原しげる氏は、私たち文士の大先輩として、お元気で、この東京にゐらつしやる様子なので

すから、書きながら、ひどく氣になつて居りました。御住所を捜し、こちらからお訪ねして、なほ精しく故人の御遺徳をも伺ひ、それから、私ごとき非文不才の貧書生に、この活字日誌の使用を御許可下さるかどうか、改めてお願いして、そのおゆるしを得て、はじめて取りかかるべき筋合ひのものであるとは、不徳の小文士と雖も、まづは心得て居りました。それが、締切日の關係やら、私のせつかちやら、人みしりやらで、たうとうその禮を盡さぬままにて、發表しました。お叱りは、覺悟の上でありました。けれどもいま、葛原しげる氏の原稿を拝讀して、そんなに、嚴しいお叱りも無いので、狡猾の小文士は思はず、にやりと笑ひ、ありがたしと膝を崩さうとした、とたんに、いけませんでした。「えちごじし、九十ぺんとは、それあ聞えませぬ太宰くん。」とありました。

逃げようにも、逃げられません。いたづらに、「やあ、それは困つた。やあ、それは、しまつた。」などと阿呆な言葉ばかりを連發し、湯氣の出るほどに赤面いたしました。文盲不才、いさぎよく罪に服さうと存じます。他日、創作集の中に編入する時には、「四きのながめ。琴にて。三十二へん。」と訂正いたします。／まことに、重ね重ねの御無禮を御海容下さらば幸甚に存じます。秋深く、虫の音も細くなりました。鏤心の秋、琴も文も同じ事なり、まづしい精進をつづけて行かうと思ひます。

右の一節の「締切日の關係やら、私のせつかちやら、人みしりやらで、たうとうその禮を盡さぬままにて發表しました。」という記述からも、「盲人獨笑」は、そう長い時間をかけて完成されたものではない、と推測できるでしょう。

さらに、井伏鱒二氏「餘談」(「太宰治全集第五卷月報5」筑摩書房、昭和三十一年二月二十日)には、つぎのような記述がみられます。

「葛原勾當日記」は、あのころ伊馬君が古本屋で見つけ、作品の材料にしたらかと云つて太宰君に貸したもので、太宰君はこれを参考にして「盲人獨笑」を書いた。／おそらく伊馬君は「勾當日記」を古本屋で見つけた

とき、盲の葛原勾當といふ琴の名人が七百頁にもわたる日記を残してゐることにびっくりしたに違ひない。古本屋でそれを買ふと、私のところに持つて来て、これを材料にして何か小説を書かないかと少し興奮の色を見せて云つた。しかし私は葛原勾當のことは以前からよく知つてゐた。私の郷里の近村の人である。「勾當日記」は私も田舎の家に置いてゐる。葛原勾當のお孫さんの葛原滋さんのうちは、今では私の生家と遠縁にも當り、勾當の晩年の弟子で盲の老婦人は、私が小學生のころ私のうちに暫く滞在して姉に琴を教へてゐたこともある。だから葛原勾當のことを材料にするのは少し遠慮があつたで辭退すると、では折角の材料だから太宰に勧めてみると云つて伊馬君は太宰君に提供した。／＼太宰君はその材料で、たちまち「盲人獨笑」を書きあげて雑誌に出した。この作品は當時あまり反響はなかつたが、自分のおぢいさんを材料に書いてあるのを知つた葛原滋さんは大いに喜んで、さつそく太宰君に鄭重な禮狀を送り、べつに自分が顧問となつてゐる雑誌へ太宰君に原稿を注文した。無論、そのころ書きたい一心であつた太宰君は、すぐに四枚か五枚のものを書いて送つた。（後略）

太宰治が『葛原勾當日記』を材料に、「盲人獨笑」を執筆するに到つた状況が、よくわかりかと思ひます。この『葛原勾當日記』と「盲人獨笑」との比較検討は、太宰治の翻案的な作品の傾向を知る上でも、重要な論題ですので、別に稿を改めたいと思ひます。ともあれ、以上に引用してきた諸種の資料から、「盲人獨笑」は、昭和十五年五月中に執筆され脱稿されたものと推測されます。

さて、つぎは「乞食學生」ですが、まず(4)の「新連載中篇／乞食學生／第一回」は、その一節に、「四月なかば、ひるごろの事である。」と記され、その時節の玉川上水の描写等がみられますから、昭和十五年「四月なかば」以後に執筆開始されたのではないかと思われまふ。掲載誌「若草」七月號は、奥付によれば、「昭和十五年六月十日印刷納本」と記されています。しかし、その広告が、「毎日新聞」昭和十五年六月十五日号（第二万五百四十一号）に掲載されていますから、実際の発売は、十五日頃であつたと推測されます。かくして「乞食學生」の「第一回」十五枚

が脱稿したのは、昭和十五年五月末日までであつたろうと思われます。

以下、「若草」八月號は、「昭和十五年七月十日印刷納本」と記され、その広告が「朝日新聞」昭和十五年七月十六日付（第二万千百六号）に掲載され、「若草」九月號は、「昭和十五年八月十日印刷納本」と記され、その広告が「毎日新聞」昭和十五年八月十四日付（第二万六百一号）に掲載され、「若草」十月號は、「昭和十五年九月十日印刷納本」と記され、その広告が「朝日新聞」昭和十五年九月十五日付（第二万千百六十七号）に掲載され、「若草」十一月號は、「昭和十五年十月十日印刷納本」と記され、その広告が「毎日新聞」昭和十五年十月十五日付（第二万六百六十三号）に掲載され、「若草」十二月號は、「昭和十五年十一月十日印刷納本」と記され、その広告が「朝日新聞」昭和十五年十一月十四日付（第二万二千二百二十六号）に掲載されています。かくして、「第二回」十五枚の脱稿は昭和十五年六月末日まで、「第三回」十六枚の脱稿は昭和十五年七月末日まで、「第四回」十五枚の脱稿は昭和十五年八月末日まで、「第五回」十五枚の脱稿は昭和十五年九月末日まで、「第六回」十七枚の脱稿は昭和十五年十月末日まで、と推測しうるように思われます。かくして「乞食學生」は、昭和十五年「四月なかば」以後に執筆開始され、昭和十五年十月末日までに脱稿したであろうと、推測しうるように思われます。

なお、この「乞食學生」は、すでに拙稿「乞食學生」（『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日）で指摘したように、「十五世紀中葉の盜賊入乞食學生」詩人、フラソワ・ヴィヨンから得たイマアジュを核とする作品」といつていいかと思われます。これに関連して、井伏鱒二氏「解説」（『太宰治集上巻』新潮社、昭和二十四年十月三十一日）の「ヴィヨンの妻」の項に引用された「美知子夫人の手記」に、つぎのような一節がみられます。

ヴィヨンの詩は、以前の作「乞食學生」にも、引用してゐますが、金木に居るころも、ヴィヨンの大遺言書を讀んでゐました。「これをよんでごらん」といつて冒頭の一詩を私に示し、又、他のもう一つの詩を、一緒に讀んで、語り合つた夕もございました。十三年の秋、結婚前に、私は、彼にフランソワ・ヴィヨンにたとへた詩の

やうな拙いものを捧げたことがございました。太宰は、「ヴィヨンの妻に」と題した本を送ってくれました。けれどもこんな事は、気障らしく、二人の間でその後語り合つた事も無く、まして、この作品と何の關係もないこととでございませう。

この一節から、太宰治がフランソワ・ヴィヨンに関心を持つようになったのは、おそらく昭和十三年の秋以降のことであろうと推測されます。では、関心を持ったのち、太宰治は、どの刊本によって、フランソワ・ヴィヨンに親んだのか、このことに關して、檀一雄氏は「小説太宰治（續）」（『新潮』第四十六卷第八號、昭和二十四年八月一日）に、つぎのように記されています。

東大の佛文科に在席したといつても、フランス語は目に一丁字もなかつたから、マラルメ、ランボーなどと口ばしつても、なに、その解説に胸をときめかすだけで、納得のゆく讀書にはなつてゐなかつた。ただ、青い何處かの文庫本で讀んでゐた、フラソワ・ビヨンの「大盜傳」が、尤も納得のいつた面白いものだつたらう。

この檀一雄氏の記述に關し、山數和男氏は、「ヴィヨンの妻論」〔批評と研究太宰治〕芳賀書店、昭和四十七年四月二十日）に つぎのように記されています。

一体太宰はヴィヨンのことをいつごろ知つたのか。またどの程度ヴィヨンを理解していたのか。檀一雄は「太宰と安吾」の中で、太宰がフランソワ・ヴィヨンの「大盜伝」を愛読していたと書いているが、このような本は今のところみつからない。（略）太宰がヴィヨンを原語でよめた筈はなく、翻訳でよんだとすれば、城左門、矢野目源一共訳の「ヴィヨン詩抄」（昭和八年、椎の木社刊）は発禁になっていたし、太宰の引用したものに該当するものはないので、おそらく佐藤輝夫訳「大遺言書」（昭和十五年三月、弘文堂書房、世界文庫）でよんだのではないか。この本は縦十七センチ×横十センチの小型の本で、青い表紙である。（本文は註、略伝、あとがきを合わせて二百十六頁）そうすれば檀一雄の「青い何處かの文庫本」という記事とも一致するし、「乞食学生」

執筆の年月とも一致する。(ただ、太宰は彼流にこれをなおしている。)

この山敷和男氏の推測は、先の「美知子夫人の手記」や檀一雄氏の「小説太宰治(續)」の記述からいっても、妥当かと思われます。しかし、「青い何處かの文庫本で讀んでゐた」のを、檀一雄氏が見たのはいつか、という点は、不明のようです。檀一雄氏「出世作のころ」(「讀賣新聞」第五五六号、昭和四十三年三月二十七日夕刊)によれば、昭和十二年の七月から、昭和十五年の十二月まで、あしかけ四年の間、私は久留米の兵營にいた。(略) 十五年の暮れに除隊になると、そのまま、まっすぐ満洲に旅立った。

のであり、『小説太宰治』(六興出版社、昭和二十四年十一月二十日)によれば、「東京にやつてきた」のは「昭和十六年の暮の事」です。「兵隊の頃、一度だけ軍用で上京した事はあるが、その時には佐藤先生をお訪ねしただけで、太宰には會はなかつた。たしか太宰が甲府あたりに出向いてゐた時期だつたらう。」と記され、「昭和十六年の暮」に「全く五年振りに太宰に會ひに出掛けて行つた」時のことが記されています。しかしこの時は、すぐ「再び満洲に旅立つ」て、昭和十七年五月に帰国して結婚し、東京都板橋区下石神井に住むまで、満洲にいたようです。したがって、檀一雄氏が「青い何處かの文庫本で讀んでゐた」のを見たのは、昭和十二年七月以前か、昭和十七年五月以後かのことであろう、と思われれます。檀一雄氏が、久留米独立山砲第三聯隊第一中隊に入隊するために、東京駅をたったのは、八月一日であつたようです。そして、太宰治と檀一雄氏とが、頻繁に往來したのは、昭和十二年七月以前のことで、あるいは、かなり早い時期に、フランソワ・ヴィヨンの詩を讀んでいたのかもしれない、と思われれます。だがいまは、その確証を得ることができません。山敷和男氏の、佐藤輝夫氏訳「大遺言書」でよんだのではないかという推定は、「乞食學生」が昭和十五年「四月なかば」以後に執筆開始されたであらうという推測と、矛盾はしませんので、いまは一応、昭和十五年三月以降であらう、と推測しておきたいと思ひます。

つぎの(7)「失敗園」は、執筆脱稿の年月日を推定するための、手がかりとなる資料がないようです。が、この作品

は、「短篇集」の中の、ごく短かいコントのような作品ですから、短時日の間に執筆脱稿されたものであろう、と推測されます。「失敗園」の掲載誌が、「東西」九月号だとすれば、おそらく、昭和十五年七月末日までに執筆脱稿されたものだろうと思われれます。

(9)の「一燈」も、執筆脱稿の年月日を推定するための、手がかりとなる資料がないようです。が、この作品も、「短篇集」中の一作品で、ごく短かいものですから、短時日の間に執筆脱稿されたものであろう、と推測されます。「一燈」の掲載された「文藝世紀」十一月號には、「昭和十五年十月十二日發行」と記されていますから、実際の発売もおそらくその頃であつたのだらうと思われれます。したがって、「一燈」の執筆脱稿は、昭和十五年九月末日までのことであつたらうと思われれます。

つぎの(11)「きりぎりす」も、執筆脱稿の年月日を推定するための、手がかりとなる資料がないようです。が、「きりぎりす」の掲載された「新潮」十一月號の広告が、「朝日新聞」昭和十五年十月十五日付(第二万千百九十七号)に掲載されていますから、同誌の実際の発売は十五日頃であつたらうと推測されます。したがって、「きりぎりす」の脱稿は、昭和十五年九月末日までであつたらうと思われれます。

つぎに(12)の「ある画家の母」は、昭和十五年十一月五日に、J O A K から放送された「短篇ラヂオ小説」の台本です。その台本は、丁寧な字で記された謄写印刷で、表紙一枚、本文十三頁から成ると聞いています。したがって、「ある画家の母」は、おそらく、昭和十五年十一月三日頃までには、執筆脱稿されていただろうと、推測されます。「朝日新聞」昭和十五年十一月五日(第二万二千二百十七号)の「ラヂオ」欄の「夜」の部の「九・三〇」には、つぎのように記されています。

短篇ラヂオ小説「或る畫家の母」(語り手)北澤彪(杉野君)三木利夫(母親)伊藤智子(少女)笠原和子
また、末尾に「十一月十六日夜半。」と記された「みみづく通信」(「知性」第四卷第一號、昭和十六年一月一日)

にも、「先日、私の甘い短篇小説が、ラヂオで放送され時にも、私は誰にも知られないやうに祈つてゐました。」(傍点山内)と記されています。

最後の(仙)「東京八景」に関しては、その冒頭の一節が、執筆にいたった状況と、執筆開始の時とを、明示しているようです。「少くとも、もう一箇月間は、お金の心配をせずに好きなものを書いて行ける。」という「身の上」になつて、「いつかゆつくり、骨折つて書いてみたいと思つてゐた」短篇「東京八景」を、「青春への訣別の辭として、誰にも媚びずに書きた」いと思ひ、「昭和十五年、七月三日」、伊豆湯が野の福田屋旅館に止宿して、執筆を開始したわけでした。また、「東京八景」の結尾には、「旅立つてから、もう十日も経つけれど、まだ、あの温泉宿に居るやうである。何をしてゐる事やら。」と、擱筆の時を示す一節がみられます。かくして、「東京八景」は、「昭和十五年、七月三日」から、「もう十日も経つ」頃、脱稿したものと推定されます。この「東京八景」が脱稿した頃に執筆されたと推測される随筆に、「食婪禍」(「京都帝國大學新聞」第三百十七號、昭和十五年八月五日)という文章がありますが、それには、つぎのような一節がみられます。

七月三日から南伊豆の或る山村に來てゐるのだが、勿論こゝは、深山幽谷でも何でも無い。温泉が湧き出るといふだけで、他には何のとりどころも無い。東京と同じくらゐに暑い。宿の女中も、不親切だ。部屋は汚く食事もまづい。なぜこんな所を選んだのかと言へば、宿泊料が安いだらうと思つたからである。けれども、來て見ると、あまり安くもない。一泊五圓以上だ。(略)／＼來て、もう十日に近い。仕事も一段落ついた。けふあたり家の者がお金を持つて、この宿へ私を迎へに來る筈である。家の者にはこんな温泉宿でも、極樂であるかも知れぬ。私は、素知らぬ振りして家の者にこの土地の感想を聞いてみたいと思つてゐる。とても、いゝところだと、興奮して言ふかも知れない。／＼(七月十一日)

この「食婪禍」が、『東京八景』が脱稿した頃に執筆されたと推測される随筆だというのは、「仕事も一段落つ

いた。けふあたり家の者がお金を持つて、この宿へ私を迎へに來る筈である。」という一節がみられるからです。井伏鱒二氏の「解説」に引用された、「美知子夫人の手記」には、つぎのような一節がみられます。

「東京八景」を書きますときは、異常ないきごみでしたから、よく憶えてゐます。昭和十五年の七月三日、太宰は、東京地圖を携へて、伊豆の湯ヶ野へ出かけ、十日ほど、仕事に打ちこむ。十日過ぎに電報を打つから、お金を持つて迎へにこいといふことで、結婚後、かうしたことは、始めてで、何か他の場合と違ふものを感じさせられました。十二日に電報が着きまして、すぐ私は出發いたしました。伊東から、下田行きのバスに乘換へて、三時間もかかり、随分遠いので、心細うございました。川を渡つて、左側の福田屋といふ宿に着いたのは、もうたそがれ頃でございます。この宿の様子は、「貪婪禍」といふ隨筆にも書いてをります。（略）仕事については、一言も申しませんでした。けれども鈍感な私にも容易な作品とは思はれず、「東京八景」が「文學界」の翌年の正月號に載りましたときも、五月に、實業之日本社から同名の單行本として出ましたときも、私には何だかおそろしいやうで、讀むことが出来ませんでした。／さて、その歸りでございます。谷津温泉で、井伏様や龜井様と御一緒に、水害に遭ひましたのは。昭和十五年の七月十三日のことでございます。

この「美知子夫人の手記」によれば、さきの「貪婪禍」の「仕事も一段落ついた。けふあたり家の者がお金を持つて、この宿へ私を迎へに來る筈である。」という一節は、夫人に「電報を打つたのちに記されたもの、と考えられます。しかし、「貪婪禍」の末尾には、「（七月十一日）」と執筆の月日が記され、「美知子夫人の手記」には、「十二日に電報が着いたと記されています。このことは、どう考えればよいのか。種々推測が可能ですが、おそらく、太宰治は「十一日」に電報をうち、「けふあたり家の者がお金を持つて、この宿へ私を迎へに來る筈である。」と思つていたのだが、「十二日に電報が着いたのだらう、と思われまゝ。それはともかく、「こゝへ來て、もう十日に近い。」という「貪婪禍」の記述から推して、この随想が、「（七月十一日）」に執筆されたものであることは、間違

いないように思われます。似たような記述が、「東京八景」の結尾にもみられます。「旅立つてから、もう十日も経つけれど、まだ、あの温泉宿に居るやうである。」と。「貪婪禍」では、「もう十日に近い」と記し、「東京八景」の結尾では、「もう十日も経つ」と記しているのです。この相違から、おそらく「東京八景」は、「七月十二日」に擲筆したのだらう、と推測しうるように思われます。また「美知子夫人の手記」からも、十二日脱稿と推測しても、支障はないように思います。

さて、「美知子夫人の手記」によれば、「その歸りでございます。谷津温泉で、井伏様や龜井様と御一緒に、水害に遭ひましたのは。昭和十五年七月十三日のことでございます。」と記されています。太宰治も、昭和十五年七月十五日付で、「水害に遭」った谷津温泉南豆荘の池田芳子氏宛に、つぎのような手紙を出しています。

このたびの御災難に就いては、お見舞ひの言葉も、ございませぬ。私たち無力にしてなんのお手傳ひも出來ず深く恥ぢているばかりであります。／＼けふまで泊めていただく度毎に何やかやとわがままばかり申し親身も及ばぬお世話になりました。／＼どうか又、みなさま御元氣をお出しなされ、先夜の思ひ出をみんなで笑ひながら話合へるやうに一日も早く御恢復下さい。

「先夜の思ひ出」とは、昭和十五年七月十三日夜の「水害」の「思ひ出」でしょう。龜井勝一郎氏も、「罪と道化と太宰治斷章」（『文學界』第九卷第九号、昭和三十年九月一日）の「鮎つりのことなど」の章に、つぎのように追想しています。

いまでもなつかしく思ひ出されるのは、鮎つりである。伊豆の南端、谷津といふ小さな温泉の近くを流れる河津川に、解禁の日はず出かけた。師匠は井伏さんで、五月三十日の夜あたりから釣竿や糸やテグスなど用意し、三十一日に谷津に出かけて、温泉にひたりながら酒を飲む。そして六月一日の解禁日の、午前零時を期して糸を垂れる。／＼（略）／＼或るとき大洪水に襲はれたことがある。それは昭和十五年の解禁日であつたか、或はそのす

こし後であつたか、時日はつきり記憶しないが、その日谷津の南豆莊といふ宿に着いたときからの凄惨な豪雨に襲はれた。次の朝早く釣るつもりで準備し、かなりおそくまで酒を飲んで寝たが、明け方、まだ暗いうちに、「水だ、水だ」と叫ぶ井伏さんの聲で私は眼がさめた。／そのとき井伏さんと太宰夫妻は階下に寝てゐたし、私だけ二階に寝てゐたので、「水だ、水だ」と言はれたとき、雨もりぐらゐにしか考へてゐなかつた。しかし階下では、氣がついたとき、すでに濁水は畳の上も流れてゐたのである。それほど急激にやつてきたのだ。宿の人も全部が二階へ避難してきた。私は二階の雨戸をあけてみて、はじめて事の重大さに愕然とした。宿の裏山からこちらへ向つて、濁流が渦を巻いて流れてきて、宿に激しくぶつかつてゐる。階下はすでに床上三尺ほどまで水につかつてゐた。周囲は暗黒であり、逃れる方法もなかつた。多分そのとき、誰もが「死」の豫感に襲はれたと思ふ。太宰は奥さんの頬に垂れた髪の毛をそつとあげてやつて、「大丈夫かね。人間は死ぬときが大事だ。」と囁くやうに言つてゐるのを聞いた。／處置なしだから黙つてゐたが、幸ひに夜明けとともに雨は小やみとなり、水は一旦ひきはじめると嘘のやうに流れ去つてしまつた。宿の階下は滅茶々々である。私たちは近くの峯温泉の方へ移つたが、あと二三時間、降りつゞけたら宿屋は倒壊し、私たちは死んでゐたらう。

「水害」にあつた夜、太宰治は、井伏鱒二、亀井勝一郎の両氏と、夕刻から降りだした大雨の中を、南豆莊前の「夕月」という飯屋に行つたようです。夜中二時頃宿に帰って、寝入りばなの三時過ぎに「水害」に遭つた、と考えられるようです。「朝日新聞」昭和十五年七月十四日付（第二万千百四号）には、「死者四名を出す／南伊豆の豪雨禍」という見出しの、つぎのような記事が掲載されています。

十二日夜來の豪雨で伊豆半島南端一帯は各河川とも氾濫したが、十三日午後五時半までに判明した被害は死者四名、行方不明六名で、家屋の流失せるもの十六戸、半壊七戸、水田二百九十八町歩、畑廿三町歩がそれ／＼流失し、十三日中電信電話は不通、縣道三線も山崩れのため交通杜絶した。

かくして、太宰治たちは、十四日に、谷津から数町離れた峰温泉に移り、バスが通ずるのを待つて、その日の夕方、東京へと出発したということです。

以上のような種々の状況から推して、「東京八景」の脱稿は、昭和十五年七月十二日のことであつたと、推定されるように思われます。

なお、伊馬春部氏「微風の便り」(「文藝時代」第二巻第六号「特集・思ひ出の太宰治」昭和二十四年七月一日)によれば、伊馬春部氏の「古日記」の「昭和十五年七月八日」の項には、つぎのように記されているそうです。

朝九時五十五分の伊東行にのりこむ。井伏さん小山君すでにあり。小山君の《魚族》出版を祝ひてなり。天皇陛下葉山へ行幸あらせらるゝにつき厳戒嚴重。お召列車と同ホームより發車。恰もわれらが列車はその前驅をなせしものゝ如し。熱川へ二時近い頃着。すでに三日より湯賀野にて待機中なりし太宰すでに來たり居りてわれらを迎ふ。熱川館、波音高きが氣になるなれど、いろいろと歡をつくす。

さらに、「翌九日の項」には、つぎのように記されているそうです。

谷津へ向ふ。井伏さんの鮎つりをはじめて鑑賞。水中眼鏡のすばらしさ(私はあるときはじめてはこめがねといふものを試してみた。)南豆莊の家族的待遇なかなかによし。夕食五時すぎよりはじまり鮎の鹽やき、鰻、さざゑなど。されど予は今夜中にぜひ歸りたきゆゑ、とめられるを振りきり振りきり、折からの雨の中、最終バスにてさよならをする。小山君は一晚のこる。伊東より横濱止りの終列車に乗換へて一時すぎ歸宅。

この「九日の項」について、伊馬春部氏は、「このときなほ一夜の勧誘を退け敢然と歸つたことを、どんなに私が後々まで非難されたことか、今でも身がちぢむ思ひがする、せつかくのやら、じの雨ぢやないかなどとふざけるのに、よくも私は歸つて來たものです。(略) 私に向ふと、このやうなことを、子供みたいにわあわあめきちらす彼だったのです。」と記されています。かくして、「九日」は太宰治も谷津へ向い一晚のこつた、と考えられます。

檀一雄氏の『小説太宰治』に掲載された戸石泰一氏編「年譜」の「昭和十五年」の項には、つぎのように記されています。

七月三日より伊豆湯ヶ野福田屋で、「東京八景」を書き、その間（八日）井伏、小山祐士、伊馬等と熱川温泉におちあひ、翌日、河津温泉、前後三日の後、再び湯ヶ野へ歸り、出迎へに行つた夫人と、歸京の途中、鮎釣りのため、なほ河津温泉に滞在中の井伏、龜井を訪ね、共に水害に遭つた。

この戸石泰一氏「年譜」の記述は、さきに引用した「美知子夫人の手記」、伊馬春部氏「微風の便り」等によつてゐるものと思われまゝ。したがつて、「前後三日」とは、七月八日、九日、十日といふことになるでしょう。十日に、太宰治は、湯ヶ野の福田屋旅館に歸つたものと思われまゝ。

以上の状況から、結論的にまとめると、「東京八景」は、昭和十五年七月三日に執筆開始され、四日、五日、六日、七日、十日、十一日、十二日の八日間で脱稿したと、推定できるでしょう。

以上に考証してきた、小説集『東京八景』収載作品の成立時点を、成立順に整理するとつぎのようになります。

「ロマネスク」 昭和九年八月末まで

「HUMAN LOST」 昭和十一年十一月二十四日

「盲人獨笑」 昭和十五年五月末まで

「東京八景」 昭和十五年七月十二日頃

「失敗園」 昭和十五年七月末まで

「一燈」 昭和十五年九月末まで

「きりぎりす」 昭和十五年九月末まで

「乞食學生」 昭和十五年十月末まで

「或る画家の母」

昭和十五年十一月三日まで

かくして、小説集『東京八景』に収載の全小説が脱稿したのは、昭和十五年十月下旬から十一月初旬までのことであつたと、断じておいていいでしょう。

しかし、この時に、小説集『東京八景』に収載のすべての文章が、脱稿したものではありません。小説集『東京八景』には、「あとがき」が付されています。「このたびは、主として昨年、後半期の作品を集めた。」（傍点山内）という一文が見られ、末尾に「昭和十六年三月」と記されているこの「あとがき」は、「昭和十六年三月」に執筆されたものと、推定されます。かくして、小説集『東京八景』に収載されたすべての文章が脱稿したのは、昭和十六年三月のことであつたと断じられるでしょう。

なお、短篇「東京八景」は、昭和十五年七月三日から十二日までの間に、執筆し脱稿したものですから、のち書名とされた短篇題名「東京八景」の成立も、この間のことと考えられます。が、この短篇題名「東京八景」を、小説集『東京八景』の題名とすることに決定した時は不明のようです。しかし、次章でふれるように、昭和十五年十二月十二日の時点で、小説集『東京八景』が、「來年春頃出版豫定の新創作集」として、すでに編集がなされていたとすれば、この時点で、小説集『東京八景』の書名も決定されていたのではないかと思われます。また、書名を『東京八景』とした理由は、「東京八景」冒頭の一節、および、さきに引用した「美知子夫人の手記」の一節等が、明確に語ってくれているように思われます。太宰治の「東京八景」の執筆に対するいきごみが、これらの一節には、あざやかに感じられるようです。

付記 この稿は、一連の「太宰治書誌」の一端として執筆した未発表の旧稿『東京八景』の書誌の一部に、若干の補筆をほどこしたものです。「東京八景」の書誌は、VI章からなっていますが、ここでは、Iの一部と

Ⅱの全部とを抜萃し掲載させていただきました。なお、拙稿「短篇集『女生徒』の成立」(「論集」第二十二巻第三号、昭和五十一年三月三十日)で考証した「I can speak」と、『皮膚と心』の成立」(「論集」第二十三巻第一号、昭和五十一年九月一日)で考証した「葉櫻と魔笛」との初出が確認できましたので、「作品名・発表誌名・巻号数・発行年月日・所載欄・所載頁」等の諸項を、補足紹介しておきます。

I can speak・若草・2月号、第十五巻第二号・昭和十四年二月一日発行・「嚴冬コント五篇」欄・88～90頁
葉櫻と魔笛・若草・6月号、第十五巻第六号、昭和十四年六月一日発行・「小説」欄・18～24頁

若干説明を加えますと、共に振仮名付で、「I can speak」の場合、目次には「I CAN SPEAK」とあります。